

人口問題研究所
研究資料第一〇二号

(昭和三〇・一・二〇)

戦後農村移動人口の移動地域別移動
状況に関する分析

厚生省人口問題研究所

はしがき

昭和二八年度の「典型的社会集団の人口学的総合調査」はわが国農村の二つの典型的な在り方を代表する地域として青森県下北郡藤坂村と香川県木田郡井戸村を選んで調査対象としたが、本集は右二村の調査結果中とくに人口移動に関する部分について行われたや、立ち入った分析結果の報告を原すものである。林茂枝官の担当執筆による。調査結果の総合的記述は、近く別途報告される予定である。

昭和三〇年一月二〇日

(一) 序

青森県緑坂村および香川県井戸村は昭和二八年度の人口学的総合調査において農村地域を代表するものとして調査されたもので、その総合的調査結果については別途報告されるはずである。

以下は右調査の個別報告の一部をなすもので、とくに人口移動について、次の二点につき分析を加へたものである。すなわち、その(一)は、移動者を、移動距離の観点から、その(二)は、更に都鄙別の観点から、その移動地域を検討したものである。

かような作業をこゝろみたのは、これを、戦前における、全じような見地にたつ農村人口移動の性格分析と比較検討することによつて、戦後農村人口移動の性格の一端を明らかにせんとするに他ならない。

而村の戦後における人口移動の概勢をみると、戦後の過剰人口の、農村へのしわざせが、漸く昭和二五年の朝鮮動乱を境として、移動超過の形に変わりだしているが、その程度は微弱で、戦後を過計するといづれも受け取り増の結果になつてゐる。

周知の如く、戦前準款時体制に即応して、悉く解放された中央地方を遁じての労働市場の労働吸引力は非常に大であり、かゝる移動促進期に行われた農村人口の向都農村は相当に激しく、移動促進態にも、その促進性を示す特質の一端が窺はれた。

しかし、戦後都市的労働市場の基盤収縮せる時期に行われざる労働移動は、その移動困難性の諸相をその移動型態の上にも反映せしめていたことは否定しがたいところである。

(二) 移動理由

移動者の移動理由別移動数

而村移動者の移動地域の検討に入るに先き、まづ、移動者が如何なる理由に基いて移動したかの概要を、しるためその移動理由別に移動者数をみると表の示す如くである。

すなわち、藤坂村においては、男子移動者一六六名中、就職又は求取を理由とするものは、五〇名(三〇、一三%)で、分家による移動者六二名(三六、三五%)より少ない割合を示している。ついで藤坂によるものが二二名(一三、二五%)で、以上三者をもって移動の殆んどの理由を占めているが、藤坂および分家によつてその過半(八四名、五〇、五%)が認められることが知られる。

女子移動者三二四名についてみれば、二六八名(八二、七%)という圧倒的部分が藤坂によつてゐる。他は着るしく少ない。就職又は求取によるものは、わづか一八名(五、五六%)にすぎない。

第一表 (三) 井戸村

農家非農家別並びに農家の階層別に見る他山の理由別他出者数

| 階層別 | 他山の理由別 | | 農家 | 非農家 | 合計 |
|------|--------|----|-----|-----|-----|
| | 就農 | 就学 | | | |
| 総数 | 100 | 50 | 150 | 50 | 200 |
| 世帯別 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 1世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 2世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 3世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 4世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 5世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 6世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 7世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 8世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 9世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 10世帯 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 不明 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |
| 非農家 | 10 | 5 | 15 | 5 | 20 |

したがって、男女を通じ、移動理由別には、男子の三割見当の職業移動を別とすれば、他は殆んど縁事と分家によるものといつてよい。

次に、香川県井戸村についてみれば、男子移動者三二七名中、一一〇名（五〇・七％）は、就職および求取によるものであり、ついで縁事による三五名（一六・一％）と分家による二七名（一三・四％）が主要な部分をしめている。この縁事と分家を合すれば六二名（二八・六％）となる。

女子移動者三五九名についてみれば、こゝでも、二六六名（七四％）は縁事を理由としており、女子移動理由の最大部分をしめることは、かわりないが、五六名（一六％）が就職および求取を理由として移動していることが目立つ。

したがって井戸村では、男女を通じ、移動理由別には、職業を求めた移動のウエイトが高まっていることがみられ、藤坂村と対照的な性格をみせている。これは、それぞれの農村において移動者を送り出す条件が必ずしも全一でないことの反映であるが、又東北農村が比較的労働市場に恵まれないこと、少くとも大労働市場から遠かく地にあるに對し、関西農村が比較的労働市場に恵まれ、これに近接していることに基くものであることも見逃し得ない。

(三) 移動者の移動地域別移動の実態

A. 青森県上北郡藤坂村の場合

以上、移動理由別にみた藤坂、井戸西村の特色は、これを、更に、これらの理由のもとに行われた、移動者の移動地別先行先を検討することによつても明らかになることのできる。

次に、「戦後農村人口移動の地域的性格に関する一考察」(研究資料九五号)において、岡山県下における出生率高低両極を示す二ヶ村の調査を対象として、戦後農村人口移動の特色を、移動者の移動したる地域を中心として検討したが、以下においても、前回と全概、観察の視点を、距離別と都鄙別の二つにおく。

まず、青森県上北郡藤坂村について移動者の移動地域別移動の実態を検討しよう。

移動の距離的性格を現わす地域を、かりに、前全概「村内」、「隣町村」、「郡内その他町村および隣郡」、「県内その他市郡」、「県外」および「外地」の六地域に分けてみるならば、男子移動者一六六名中、「村内」に移動したものの二七、一%が最も多い。(亦二表参照) ついで、「郡内その他および隣郡」への移動(一九、八八%)が多く、「県外」へ移動したものが三位(一八、六七%)をしめている。「隣町村」への移動はごく僅かの差の第四位(一八、〇%)となつてはいるが、「県外」および「外地」をのぞく、比較的近距离への移動を合計して、男子移

第三表 藤坂村

農家非農家別並びに農家の階層別に見る移動地域別他出者数

| 階層別 | 地域別 | | 村内移動 | 隣町村 | 隣郡 | 県内其他市街 | 県外 | | 不明 | 計 |
|----------|-----|-----|------|-----|----|--------|----|---|----|----|
| | 男 | 女 | | | | | 男 | 女 | | |
| 総数 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 45 | 72 | 30 | 114 | 33 | 87 | 9 | 8 | 31 | 31 |
| 0.3町未満 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 19 | 10 | 1 | 4 | 6 | 3 | 1 | 3 | 1 | 3 |
| 0.3町0.5 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 100 | 150 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 0.5町1.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 55 | 26 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 | 4 | 3 | 5 |
| 1.0町1.5 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 26 | 5 | 4 | 1 | 4 | 1 | 3 | 1 | 3 | 3 |
| 1.5町2.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 23 | 15 | 5 | 2 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 2.0町3.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 19 | 5 | 3 | 5 | 2 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 |
| 3.0町5.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 49 | 37 | 4 | 16 | 3 | 8 | 5 | 3 | 6 | 5 |
| 5.0町10.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 非農家 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |

動者の約七割余をしめていゝることがわかる。残余の二割余が「県外」「外地」等比較的遠距離移動を行つてゐるわけだ。

この關係を女子移動者三二四名についてみると、「隣町村」へ移動した者（三五、一九%）が最も多く、ついで「郡内その他および隣郡」への移動が（二六、八五%）が三位をしめ、「村内移動」（二二、二二%）が四位である。「県外」へ移動した者は（九、五%）が五位、「県内その他郡市」への移動は男子の場合全様にごくわずか（三、四%）である。

したがつて、女子の場合も、「村内」「隣町村」「郡内その他および隣郡」並に「近接地域」への移動が殆んど大部分（八四、二六%）で、女子移動者の約八割七分は県内に移動してゐることが知られる。県外へ移動した者は、一割にみたないのである。

藤坂村では、男女を通じて、比較的距離移動が優勢であるが、男女別には、女子の方により優勢である。

県外への移動は男女とも甚だ不揃であるが、その比重においては、男子の方がより多く県外へ移動してゐる。

次に、移動者の経営規模別農家階層と、その移動の距離的關係をみよう。まず、男子について、「村内移動」をした者を、階層別にみれば、中層に或る程度と、むしろ上

層に比率が高く、一町以下下層には全くみられない。

ついで、「隣郡」へ移動した男子は、一町以下下層に比率が高く、一町以上層には低い。「県外」へ移動した男子は、概して一町以下の下層、非農家、および上層農家に比率が高く、中層には比較的移動比重が少ないといつてよい。

「隣町村」へ移動した男子は、階層的には、いづれかといへば、中層および上層に比率が高く、下層に低いといつてよい。

「県内その他市郡」は、総体的に移動は僅少であるが、中層に於いては、高く、上層には殆んどない。

「これを女子についてみれば、隣町村」へ移動した女子は、階層別には、各階層ともみられるが、中層および上層に比較的比率が高く、一町以下下層に低いといえる。

ついで「隣郡」への移動もいづれの階層にもみられるが、中層と最上層に比較的比重が低いといえる。

「村内移動」については、上層に比較的比率が高く、中層は少なく、最下層には全くみられない。

「県外」へ移動した女子は、比較的の下層農家に於いて比率が高く、中層および上層は少くない。

「県内その他市郡」は、男子全数少なく、二町以上層には金やない。いづれかといえば、下層に比重がみられる。

以上の如く、移動巨萬と農家階層的関連は必ずしも判然と看取され得ないが、比較的明らかに見られるものをいへば、次の如くであろう。

すなわち、県外への移動は、男女ともに下層農家に比率が高く、男子は上層農家および非農家にも高い。中層農家は県外への移動比率はむしろ極く、「隣町村」への比率が高い。そして「村内移動」の如き近接地域は、下層農家には全くなく、上層農家に比率が高いといえる。

かゝる移動者の移動地域別移動先にみられる特色は、その移動理由によつて影響されたものであることは容易に察知されよう。すなわち職業移動が比較的少なく主として縁組分家等による移動であることの反映である。そして、それが比較的近接地に求められられているといえる。

次に、かゝる巨萬関係による看取を离れて、更にこれを都郡別に看察しよう。(表三参照)

すなわち、男子についてみれば、「村」への移動が(四三・三七%)で「一町」への移動は(一一・八%)で「二町」は(六六都府)で、かなり移動比率は低下し(一〇・二四%)、三町位は(中郡)で更に低下(八・八%)となり、そして、大郡への移動比率は(一〇)

第三表 藤坂村

農家非農家別並びに農家の階層別に見る都鄙別他出者数

| 階層別 | 都鄙別 | | 計 |
|-------|-----|---|---|
| | 村 | 町 | |
| 総数 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 〇三町未満 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 〇三〇〇五 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 〇五〇一〇 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 一〇〇一五 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 一五〇二〇 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 二〇〇三〇 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 三〇〇五〇 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 五〇〇以上 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 非農家 | 男 | 女 | |
| | 男 | 女 | |
| 計 | 男 | 女 | |

づか三、六%である。小都市へはわづか一例(一〇、六%)あるのみである。

女子も全般に「村」への移動が(五六、四八%)で首位、「町」が(二六、二三%)で第二位であるが、「いづれも男子のそれより比率が大である。これに反し、中都市への移動は(四六、三%)、六大都市への移動は(三、四〇%)、大都市へのそれは(三、七八%)となつていて、これら都市への移動比率はいづれも男子の場合より低い。

更にこれを階層階級との関連においてみれば、男子において「村」への移動比率の高いのは中層および上層であるが、下層は低い。しかし、「町」への移動は下層とくに五反未満層に比率が高く上層は低い。

「六大都市」への移動は、全体として比率は低下するが、最下層がや、高く、中層および上層はそれより低い。

「中都市」への移動比率はなお低い。が、それらの中では中層にや、高い。

「大都市」への移動比率は一層低下するが、中層および下層には殆んどなく、上層にや、みられる。

女子において、「村」への移動比率は男子全般上層に高く中、下層と低下している。「町」への移動比率はそれ程差はみられぬが下層に比較的高い。

「中都市」および「六大都市」への移動比率は全体として低い。が下層にや、比率が高い。

「大都市」への移動比率も一層低下するが、非農家にや、高く下層には殆んどない。

以上を簡単に要約すれば、藤坂村における移動は、県外遠距離移動よりも、比較的近接地移動の方が多く、県外移動は男子により多く、女子の近距離移動の特性を現わしているといえる。

しかし、階層別にみて注目すべき傾向としては、上下の階層間および非農家が県外に遠く移動しているという点である。これは戦前移動距離に下層層は、遠距離移動をしないとされたこと、異なる傾向といえる。むしろ、大労働市場から遠距離となるにつれて、移動傾向が分散的となり、漸次下層層も遠距離移動をする傾向が生ずるといわれたのと似た傾向であり、かつそれが一層激化されているといえる。

この点には、都鄙別移動において、六大都市への移動となって現われている。

中層と考へられる農家は、県外移動は比較的少ないのが特徴といえる。

都鄙別移動先については、いままでもなく村と町とが主要移動地となっている。

戦前において村と町とが、女子にとって、とくに恰好の移動地であり近距離移動の特性を有する女子労働のよき帯懸地とされてきたが藤坂村にみられる戦後の傾向はこれと異なるところはない（たとへ、縦組移動を主とするにせよ）。たゞ遠距離間都移動の特性を有する男子においても、

村と町とが主たる移動先である氣にこの村の移動の特異の傾向が疑はれるといふ。

B. 香川県木田郡井戸村の場合

更に、香川県木田郡井戸村における、移動者についてその移動地域別移動の突態を検討しよう。
この村も地理的には、関西における大労働市場たる京阪神地方とは、海上をへそで、かなりの遠距離にあるといつてよい。

しかし、在来、よく船を海路交通を利用して、本土（中国方面と関西方面）との間に相当多量の移動交流者を出してきたのである。

いま、移動地域を全概に、「村内」、「隣町村」、「郡内その他町村および隣郡」、「県内その他市場」、「県外」および「外地」の六地域に分けて観察しよう。

すなわち、男子移動者二一七名中「県外」へ移動したものの（五三、五三%）が首位をしめ、ついで「隣郡」（一九、三五%）が第二位、「村内移動」が（一三、九〇%）で第三位、「隣町村」への移動比率は著しく低下し（三、二三%）で第四位、「県内その他」は更に少なく一、三八%をしめるにすぎない。（次表参照）

第四表 井戸村

農家非農家別並びに農家の階層別に見た地域別他出有数

| 階層別 | 地域別 | | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | 階層別 | |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 村内 | 村外 | | | | | | | | | | | | |
| 総数 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 219 | 216 | 219 | 216 | 219 | 216 | 219 | 216 | 219 | 216 | 219 | 216 | 219 | 216 |
| 0.3町未満 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 0.3-0.5 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| 0.5-1.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 |
| 1.0-1.5 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 |
| 1.5-2.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2.0-3.0 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 不明 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 非農家 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| | 6 | 5 | 6 | 5 | 6 | 5 | 6 | 5 | 6 | 5 | 6 | 5 | 6 | 5 |

すなわち、「県外」への移動比率が高く、「村内」、「隣町村」等最近接地への移動比率は僅少であつて、この最近接地移動比率が優勢を示し、県外への移動比率の低くかつた藤坂村の場合と対照的な形を示している。

この関係を、女子移動者三五九名についてみれば、「隣郡」へ移動した者の、比率が最も高く（四三、八一％）、ついで県外への移動（二三、六三％）が次位、「村内」への移動（一一、六八％）が、次三位、隣町村への移動（二、八四％）が次四位、県内その他は男子全株ごくわずかである。

女子の場合には、さすが、比較的最近接地域の隣郡が第一であるが、三割余が県外へ移動して第二位をしめるのは、最近接地移動の優勢にして県外移動のごく微弱なる藤坂村の場合に比較し、やはりこの村における移動性の大なることの一端を示しているといつてよい。

更に、この階層別移動地域を農家階層との関連においてみれば、男子「県外」への移動はさすが、各階層とも相当高い比率を示しているが、上層と下層および非農家により高く、これらはいづれも五〇―六〇％を示している。かつ、中層も相当高いことが注目される。

隣郡への移動比率は相当低下するが、階層としては中層に高いことが明白である。下層は低い。しかし、村内移動は下層に最も高く、ついで上層が高く、中層は低い。

| | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 〇三〇・五 | 三二一四三三・五〇三三 四五五五六三・三三 四五五三三・三三 六九〇三三三 九九三三三三 三三三三三三 四八三三三三 三三三三三三 三三三三三三 | | | | | | | | | | | | |
| 〇五〇・一〇 | 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 | | | | | | | | | | | | |
| 一〇〇・七五 | 九九五三五九 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 | | | | | | | | | | | | |
| 二〇〇・三〇 | 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 | | | | | | | | | | | | |
| 木期 | | | | | | | | | | | | | |
| 非農家 | 七三三三三三 八八九八五五 四四四四四四 三三三三三三 | 九九三三三三 五五五五五五 四四四四四四 三三三三三三 | 九四三三三三 五五五五五五 四四四四四四 三三三三三三 | 二二二二二二 二二二二二二 二二二二二二 二二二二二二 | 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 | 四四四四四四 四四四四四四 四四四四四四 四四四四四四 | 五五五五五五 五五五五五五 五五五五五五 五五五五五五 | 六六六六六六 六六六六六六 六六六六六六 六六六六六六 | 七三三三三三 七三三三三三 七三三三三三 七三三三三三 | 八三三三三三 八三三三三三 八三三三三三 八三三三三三 | 九九三三三三 九九三三三三 九九三三三三 九九三三三三 | 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 三三三三三三 | 四四四四四四 四四四四四四 四四四四四四 四四四四四四 |

すなわち、男子は、「六大都市」への移動が第一で（三三・七三%）、「村」への移動（一一・一五%）が才二位。大都市への移動は（一・九、五五%）で才三位となるが、以下は移動比率は非常に低下し、町への移動（七・八%）、中都市への移動（三・二三%）、小都市へ移動は（〇・九二%）の順となつている。

女子は「村」への移動(三八、一六%)が首位をしめ、ついで「町」への移動(三一、一八)が高く、大都市への移動比率ははるかに低下する(一一、八一%)。大都市への移動は更に低率で(一一、九八%)あるが、小都市、中都市への移動は二層わづかである。

これを、農家階層との関係においてみれば、大都市への男子の移動比率は上層および非農家に高い。中層を相当高く、下層はごく低率である。

しかし、村への移動比率は、下層に最も高く、ついで上層がや、高いといえるが、他はそれらより低率である。

大都市への男子の移動比率は、上層および非農家にや、高いといえるが、中層もかなりの比率を示している。

町への移動比率は全体として非常に低く、最上下両層には全くみられない。

中都市へは、主として、非農家と下層に、小都市へは中層と下層にいつれも、ごくわづかの移動がみられるにすぎない。

「村」への女子の移動比率を階層別にみれば、上層に最も高く、ついで中層に高い。下層の比率はや、低下する。非農家の比率は一層低い。

村について多い女子の移動地域たる町への移動比率を階層にみれば、上層と中層に比較的高く、

下層と非農家に低い傾向がみられる。

大都市への女子の移動比率は、下層と非農家に比べ、高いといえる。上層はそれについている。

大都市への移動比率は、非農家に高く、ついで下層に高いが、中層および上層は低いといえる。

小都市および中都市への女子の移動比率は、いずれも非常に低い。概していえば、非農家に比べ、高い傾向がみられるにすぎない。

以上を簡単に、藤坂村における移動傾向と対比しながら要約しよう。

すなわち、井戸村における移動は、これを距離的観点からみても、全体として、より遠距離移動の性格を有することが窺われる。男子において、異外移動を第一とすること、女子においてもその比率の比較的高いこと等、これである。零細経営に悩み高い出生率を有する全村段として、移動は必須の要請であり、いわゆる人口排出力の強く弱くところ、遠距離移動も当然の帰結であるといえる。

農家階層的にみて注目される傾向としては、上層と下層および非農家が、異外遠距離移動をよ

り多く行つてゐる点であり、この傾向は、比率は別として、藤坂村においてもみられるところである。

(三三)

ついで注目されるのは、中層農家も相当多く県外移動をしており、全七階層の県外移動の少ない藤坂村と対照的な傾向をみせておることである。

以上の傾向は、当然、都市別関係に反映され、とくに男子において大大都市と大都市が比較的優勢である。

かく、井戸村において中層農家が県へ、そして又都市への移動を多くしているのは、この村における、中層農家の人口圧力の強さの一端を示すといえようし、又移動性に富んだその性格を窺いうる。(この点、先きに分られた、岡山県久郡久村および全後月郡青野村における中層農家の比較的「村」への移動を主としたのと対比しうるであろう)

ごく大まかにいえば、藤坂村は、資本主義の中心圏から離れた東北の静まれる社会の閉鎖性の一端を現わし、その人口移動も外延伸張的とはいえず、大労働市場への集中的な労働移動の傾向も勿論みられず、遠かく地移動に対し消極的、退却的な姿をみせている。これに反し、井戸村は、~~岡~~岡田における資本主義労働市場の中枢との結びつきに影響され、極めて移動促進的であり、かつある程度集中的な移動傾向をみることが出来る。

そして、いづれにおいても、上層農と、下層農と非農家とが、遠距離移動を行う傾向を示しているのは、農村からの離脱が、それらの階層によつて進められることをいみするし、中層農の移動がこれらと対照的に農民的定着性をみせるものといえよう。

しかも、中層農のこの傾向が、井戸村においてすでに、明らかに崩れかけていることを見逃すわけにはいかぬといえる。

男子は比較的遠距離移動をなし、女子は近距離移動をするという一般の傾向は、戦後の事情をつたへる以上の資料においても認められる。

しかし、異外移動が優勢であるということは、戦後の移動困難期において、距離の制約をこえて、遠く雇傭社会を求め、事情に迫られていることの反映であるといえる。

戦前、遠距離移動は主として、上層農家によつて行われたが、以上にみられる如く上層の外に、下層および非農家による遠距離移動の傾向は、戦後における移動の直直性を立証するに足るものである。

戦前、中央労働市場から遠かくとなるにつれ地方中都市に、分散的に行われた。比較的比重の高い移動傾向は、戦後は全く萎縮している。これは軍需工場の消滅による地方的労働市場の潰滅をいみするであろうが、又中小都市自体の、農村労働力に対する吸収度の減少、その人口収容力

の飽和状態にあることを物語るといえる。

(三四)

村への移動の微弱であつた戦前に対比し、戦後、村への移動の比重の大なることがみられるのは、いうまでもなく農村人口の農村離れと、盟内人口の農村累積を物語るものであるが、人口過密、零細経営に悩む井戸村において、極力向都離村せんとする傾向がみられるのは、この一点を突破せんとする積極的意欲の強さを意味すると共に、(朝鮮動乱後の移動促進の反映もある)、零細経営における労働収容力の過飽和、限界状況にあることを窺うにたるといえるであろう。